

平成22年 6月25日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18320126

研究課題名（和文） 吉備地域における巨大古墳形成過程の研究

研究課題名（英文） Archaeological research on the formation process of gigantic tumuli in Kibi district, prehistoric Japan

研究代表者

松木 武彦（MATSUGI TAKEHIKO）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：50238995

研究成果の概要（和文）：古墳時代中期の5世紀には、日本列島の広い範囲に巨大な前方後円墳が築かれた。巨大古墳には、古代国家形成過程の日本列島の社会の本質が反映されている。本研究は、このような巨大な古墳そのものではなく、それが作られた時代の集落や一般層の墳墓の状況を把握することによって、巨大古墳の形成過程やその歴史的背景を解明した。

研究成果の概要（英文）：In the middle of Kofun era (5th century AD), a lot of gigantic tumuli with keyhole-shaped mound were built throughout mainland Japan. These burial mounds are considered to reflect the society in the process of state formation in ancient Japan. In this study, we elucidate the process of development and historical background of these chiefly tumuli focusing not on themselves but on surrounding burials of normal people and their settlements in Kibi district, Okayama prefecture, Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,100,000	0	5,100,000
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
総計	12,200,000	2,130,000	14,330,000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：古墳 前方後円墳 古代国家 人口 吉備

1. 研究開始当初の背景

日本列島の先史～原史時代は、大規模かつ入念な墳墓を築くという文化によって特徴づけられる。この文化はとくに近畿地方を中心として隆盛するが、それ以外にも大規模な墳墓を築いた地域があり、吉備はその代表といえる。とりわけ、5世紀前半に築かれたと考えられる造山古墳は、墳丘の長さが350mに達し、全国第4位の規模をもっている。こうした巨大古墳が築かれた社会的背景や歴史的経緯を考えることによって、古墳時代の吉備の歴史的特性のみならず、日本列島古墳時代社会の人類史的特質に迫る手がかりが得られると考えられた。

巨大古墳ばかりを、いかなる先進技術を用いてどれほど調査しても、それだけでは巨大古墳の本当に理解には到達できない。巨大古墳は、ひとり社会から遊離して存在するものではなく、社会のさまざまな局面のさまざまな動きが歴史的・文化的脈絡の中で結晶化したものだからである。したがって、巨大古墳の本質をえぐり出すためには、それを生み出した社会のさまざまな局面のさまざまな動きを細大漏らさず明らかにし、それを前後の歴史的文脈に沿って分析・検討・洞察していく仕事が必要である。このことは、日本考古学の古墳時代研究では、ほとんど成果が出されていない状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、上記のような、いわゆる「ボトム・アップ」の手法による巨大古墳の解明を目指して、巨大古墳そのものを対象とした作業ではなく、それを支えた社会の根底や縁辺の姿を復元することを目指した。

具体的には、巨大古墳が形成される古墳時代中期を中心に、それをはさむ前期から後期までの古墳時代全般の時間幅の中で、社会を構成した普通の人々の一人一人の生と死に関わる営みをもっとも直接的に反映する竪穴住居と一般成員の埋葬の発掘資料を集成した。さらにそれを地域ごと、吉備中枢部を対象にその時間的・空間的展開を追うことによって、

その歴史的展開の中に、巨大古墳を位置づけることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

以上のような目標のもとに、本研究は以下の二つの大きな作業の方法的指針をもった。

(1) これまでに積み重ねられたさまざまな機関や組織による発掘調査の報告データをもとに、弥生時代から古墳時代の竪穴住居・建物および墳墓・埋葬施設のデータベースを作成し、そこから人口の動きを軸に据えた社会の構造と動きを再現していく作業である。

竪穴住居と掘立柱建物については、時期別・地域別に計数を行い、地域ごとの変動を明らかにした。また、純粋な位置データをもとにした、既存の地域区分の枠組みによらない空間解析も試みた。

墳墓については、前方後円墳・前方後方墳を主たる対象とした多数の先行研究のほか、小古墳の展開から吉備地域の古墳時代像とその変化を考察した先行研究をもとに、時期を追って地域別の展開状況を具体的にあとづけた。

(2) 巨大古墳形成期の小墳の内容を、研究の目標に照らし、一つのサンプルとして具体的に明らかにするための調査を行った。具体的には、倉敷市真備町下二万所在の小型前方後円墳である勝負砂古墳を対象に、2006年度と2007年度に埋葬施設の内容と構造を解明する目的の発掘調査を実施した。

4. 研究成果

吉備中枢部を対象に、古墳時代の人口の中枢を反映すると考えられる竪穴住居1,000棟余および小墳の埋葬施設約200の発掘資料を中心としつつ、表面観察によっておよその時期と分布が知られる小墳約1,500基のデータを補助的に扱うことによって、巨大古墳が形成された時期の社会の動きを、人口という根本的な要素から、次の2点において明らかにできた。

(1) 巨大古墳を一つの頂点とする古墳

時代の約 400 年間は、吉備中枢部で大きな人口の変動が生じた時期に当たる。

前後の時期に比べてどの程度の変動率であったかという点は今後の課題であるが、別稿を準備中の弥生時代の人口変動と比べると、その増減の幅は相当に大きく、動きは複雑である。とくに、本研究で西部と東部に分けて明らかにしたように、この変動は時間的な推移のみならず、空間的な変化をはらんでいる。

(2) 吉備地域において、古墳、とくに前方後円墳の規模と築造数とがともに増大する前期から中期にかけての時期は、現有の資料の分析による限り、人口が高揚するのではなく、逆に低落していく段階に当たっているとみられる。

さらに、そうした中で、吉備随一の規模をもつ造山など、中期前半の巨大古墳は、人口が吉備中枢部全体で減少した中で局所的に集中した場所に築かれたものと推測された。すなわち、人口が全体的に高揚して生産力が発展した段階ではなく、逆に、人口が低迷して全体の生産力が鈍ったときに求心性をもった特定の地域に巨大古墳が現れるという、一つのパターンが析出された。人口が高揚して地域全体で生産力が発展したとみられる中期後半に、古墳の規模がむしろ縮小していることも示唆的で、古墳と人口および生産力との複雑な関係を探るための手がかりが得られた。

以上のような人口の動きと巨大古墳の形成との間に、具体的にどのような因果関係があるのかという問題の解明は今後委ねられる。しかし、築かれる古墳の規模が、単にその地域の地理的条件などから機械的に算出された「生産力」に規定されるものでもなければ、政治的な変動に全面的に決定されるものでもないことが、住居と小墳という、その社会の人々のあり方をもっとも直接的に反映するデータの整理から、ある程度明らかにできた。社会の構造やその変化のあり方を根底で決める要因は、人口である。その点を

踏まえた地道な分析からの「ボトムアップ」によって巨大古墳の複雑な歴史的性格に迫る展望を、以下のような今後の課題として得ることができた。

(1) 人口の動きにもっとも根本的な影響を与える環境変動の具体的な様相を、実際のデータに基いて明らかにしなければならぬことが判明した。古気候や古植生を復元するさまざまな手法を体系的に総合することによって、古墳時代における吉備地域の環境変動のプロセスが復元されることが期待される。

(2) 次に、そのような環境に対する人々の働きかけと再生産のもっとも直接的な痕跡である耕地の開発と維持に関わる考古資料を集成し、再整理することによって、農耕を主とする生産活動の展開過程を明らかにしなければならない。さらに、そのようにして人々が作り出し、変化させた社会の内容を反映する集落の内容や集落間の関係についても、墳墓と同様の比重をもって分析を深めていく必要があることも明らかになった。

以上のほか、上記 3 - (2) の倉敷市勝負砂古墳の調査成果については、下記の通りである。

勝負砂古墳は墳丘長 43m の帆立貝形前方後円墳で、周溝をもつ。後円部の中央に長さ 3.6m・幅 1.2m の竪穴式石室があり、人骨のほか、鏡 1・馬具一式・鉄刀 2・鉄鏃 2・鉄鎌束 3・鉄製農工具・滑石製小玉・砥石・土器（壺）などの副葬品が未盗掘の状態を保って出土した。これらの分析から、勝負砂古墳は、吉備における巨大古墳築造期に当たる 5 世紀後葉に築造されたもので、その内容から、巨大古墳の築造を支えた在地の小首長の歴史的な性格が具体的に明らかになった。とりわけ、副葬品の内容や石室の構築技法にみられる渡来的な性格は、吉備における巨大古墳築造の背景にある国際的な性格を示唆する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

授

研究者番号：20172611

〔雑誌論文〕（計1件）

①松木武彦、古墳がしめすコトの考古学、季刊東北学』22、査読無、2010、82-92

〔学会発表〕（計2件）

①松木武彦・今津節生、未盗掘の竪穴石室、勝負砂古墳の科学的調査、第25回日本文化財科学会、2008、鹿児島市

〔図書〕（計3件）

①松木武彦、岡山大学大学院社会文化科学研究科、吉備地域における巨大古墳形成過程の研究、2010、80

②松木武彦・今津節生・片山健太郎・中島直樹・中原香織・幡中光輔・藤原摩耶・水野蚩・三好元樹・森仁優・山口雄治、学生社、勝負砂古墳調査概報、2009、62

③松木武彦・秋山奈美・石坂泰士・大石恵子・片山健太郎・笹栗拓・村瀬奈穂・森井敦子・森仁優・山梨千晶、岡山大学文学部、未盗掘古墳の発掘調査 勝負砂古墳第5次発掘調査概報、2008、34

〔その他〕

勝負砂古墳発掘関連報道

「未盗掘の石室出土」（山陽新聞、2007年3月15日朝刊1面）

「未盗掘の竪穴式石室」（読売新聞大阪本社、2007年3月15日社会面）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松木 武彦 (MATSUGI TAKEHIKO)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：50238995

(2) 研究分担者

新納 泉 (NIIRO IZUMI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教